

人ふびきる「ママ」

題字・永六輔

街路樹の木々が黄色く色づいた11月下旬。皇居・千鳥ヶ淵にほど近い東京都千代田区三番町のオフィス街に、われわれが目指す会社がある。

ダイヤル・サービス株式会社。電話を使ったビジネスの先駆けであり、子育て経験のある女性なら誰もが知っているであろう「赤ちゃん110番」を生み出した会社である。「お待ちせました〜！」

颯爽と駆け足で登場した女性こそ、この会社の創業者で代表取締役社長の今野由梨さん(79)だ。

若々しいという表現も失礼なくらい、年齢をまったく感じさせない、ひとりの女性としての姿がそこにあった。若

い経営者で今野さんを「お姉さん」「お母さん」と慕う人がいるというのもうなすける。「足腰がしつかりしているのは父親のおかげ。何しろ3歳のころから、父に連れられて三重の山野をくまなく歩いたんですから」

今野さんは今年、1冊の本を書いた。タイトルは「だじょうぶ」。(ダイヤモンド社刊)。仕事や人間関係など、さまざまな試練や苦悩を、生きる力へと変えるためのアドバイスが満載だ。その冒頭に、こんな一文がある。

「あの経験がなければよかった」と思える出来事は、人生で何ひとつない。それは、数々の想像を絶する苦難の経験を経て、ひとつ

ひとつ夢を実現してきた今野さんの、偽らざる言葉なのである。

女性が会社を興すなど考えられなかった時代、たつたひとりで男性社会に立ち向かった今野さん。立ちほだかるさまざまな壁をぶち破り、世の中の人の幸せのためにと走り続けてきた。

株式会社DeNAの創業者で、今野さんを兄貴のような存在だと慕う南場智子さん(53)は言う。

「私も同じ起業家ですけど、私の世代は、女性ならではの苦勞というものは、まったくなかった。それは、今野さんのような先輩がひとつひとつ乗り越えてくれた、その恩恵にあずかっているからです」

なぜ今野さんは、前例のない道に挑んだのか。その理由を知るには、70年の時をさかのぼらなければならない。

三重の山野を父と歩いた原体験

今野さんは1936年、三重県桑名市に6人姉妹の上から2番目として生まれた。「活発だけど、あまりおしゃべりでなく、どちらかというときと寡黙な子でした」

機械好きでスポーツマンだった父は、桑名の目抜き通りで、自転車店を構えていた。カメラ好きで、ライカやバル

ディックスといった世界の名機を収集。休日にはカメラを抱え、幼い今野さんを連れて三重の山や海を駆け巡った。「撮影旅行から帰ると、靴を脱ぎ捨て、父とふたりで暗室にこもって現像をする。印画紙を現像液にチャブチャブすると絵が浮き出てきて、まるで魔法の世界でした」

一方、母親は朝から歌を歌い、一日中、笑っているよう

な、そんな女性だった。「父は芸者さんにモテたそう。町内の青年会などでそういうところに遊びに行くときは、母が私たち姉妹を連れて盛大にごちそうしてくれ、その後、映画館にも連れていってくれる。それがとつてもうれしかったことをよく覚えています」

1941年に太平洋戦争が勃発。戦争が激しくなり、暮らしてもほとんど厳しくなっていく中で、今野さんは次第に母に対して嫌悪感を抱くようになった。

食糧がなくなると、母は自転車に乗って、父親のカメラを食糧に変えてくるようになった。

「高級カメラだけあって、帰ってくる自転車の前にも後

現在、電話を使ったビジネスは数多く存在するが、その第1号となる会社は、1969年に産声を上げた。男性社会、法の規制など、そびえ立つ大きく厚い壁にたつたひとりで挑み、そして乗り越えてきた――女性起業家の先駆け、今野由梨さんの半生に迫る！



ダイヤル・サービス株式会社社長
今野由梨さん

明日を信じる力

女性起業家二期生の
長く険しい「挑戦」の日々

ろにも山ほどイモや餅が積んでありました。お腹がすいていたから食べ物はいれしかなかったけれど、反面、あんなに父が大事にしていたものを勝手に持ち出して、イモや餅に変えてくるとは何事か、という思いも強くなりました。



18歳ごろの今野さん。左の写真は三重・四日市の海水浴場で姉妹6人そろって(向かって左)。右は家の自転車店の前で(右端)



しかも母は、その食糧を、困っている人に分けてきてしまふので、最後は半分くらいに減っているのだ。
「こんな時代に、歌を歌って大声で笑っている母を見て、バカじゃないか」と思うようになりました。そのとき私はまだ、母の、人間としての本物の知性、人間力というものを感じることができませんでした。
料理や洗濯、掃除、裁縫、

女性だからこの戦いの始まり

1945年7月17日の未明、100機はあろうかというB29爆撃機が桑名を襲撃、今野さんの住む市街地や工場に、5000発以上の焼夷弾を投下した。
あつという間にあたり一面が火の海になる中、当時9歳だった今野さんは、たったひとり、親や姉妹からはぐれてしまった。
「このまま死にたくない! どうか生かしてください、生きて必ず世の中の役に立つ人間になりますから」と、神様に祈り続けていました。
どこをどう逃げたかわかりませんが、逃げる途中で気を失ったらしく、気がつけば知らない男の人に背負われていました。
数百人の死者が出るなか、なんとか命拾いした今野さんだが、そのときの恐怖は、子

ども心に、大きな傷を残した。「いまだいうPTSD(心的外傷後ストレス障害)ですね。それからあまり笑わないうい、笑えない子どもになってしまった。そして、自分が大人になったら、必ずアメリカに行つて今夜のことを話さなければいけない、とも思うようになったのです。
なぜ、未来のある子どもを殺しに来なければいけなかったのか、自分の体験として話に行く。絶対に許さない。そのためにも、東京の大学出て勉強しなければ」と。
家も街も灰になった。教えきれないコウモリの棲み家だった天を突く大イチョウも、美しい蓮池も、お寺の境内の鐘つき堂も姿を消した。コウモリや鳩の卵やおたまじやくしはどこにいったの?」
埋めることのできない喪失感



政府「税制調査会」など、務めた審議会は44に。交友関係も政界、財界、文化人と幅広い

に心は病んだ。
中学を卒業し、三重県立桑名高校に進学、成績は常にトップクラスだった。
大学に進むつもりではいたが、そのことを親に告げると、親戚までやって来て猛反対を受けた。
「なんで女だてらに大学に?」と。周囲の大人たちの冷ややかな眼差しに父も、絶対反対、もし行くなら勘当だ。お金は送らない、それでも行くのかと言われ、私は、それでも行きますと答えました。
大学は見事、津田塾大学英文学科に合格。
しかし、大学に行くための資金はどうするか。国の奨学金はもらえないことになったがそれだけではとても足りない。そんなとき、思いがけないことが起こった。桑名市で

に役立つ人になることをお約束します。だから奨学金はお譲りいたしません。私がいた

大人たちの反対を押し切り、泣きながら夜汽車に乗って東京に向かったときのこと、忘れることはできない。
大学に入學すると、アカデミックな方面より、目まぐるしく変化する実社会の動向に目が向いた。英語の発音学などにはまったく興味を持てず、単位のギリギリまでサボる日々、かわりに打ち込んだのは、

1日4回毛作のバイト生活を続けて

大学を出て就職をすれば、社会の第一線で活躍できると考えていた今野さん。一流企業へ入るべく就職活動を始め

曾野さんの小説「せつたい多数」はバイト時代の今野さんがモデル



人海ビギナーズ

「受けた会社のすべてに断られました。面接で私が、男に負けない仕事をします、定年まで頑張つて社長を目指しますと宣言すると、そんなにやる気を出さなくてもいい、主戦力たる男性のサポートを、ハイ、ニコニコやってくればそれでいいんだ」と言われ、「就職が決まらないうちに、大学を卒業。誰も雇ってくれないなら、自分で会社を

興すしかない。10年後、32歳で会社をつくる」と決意し、人脈と資金を集めるために、1日に4つを掛け持ちするアルバイト生活を始めた。
「早朝はチラシ広告の雑文書き、午前は作家の三浦朱門さん・曾野綾子さん夫妻の口述筆記、午後は『街の歌声』(TBS)というテレビ番組のレポーター、深夜は新宿の歌声喫茶で演出や企画、広報のバイトをしていました。
また、学生新聞の取材知り合った産経新聞の編集長から、映画評論や記事の校正のアルバイトをいただいていた」

電話を使ったビジネスとの出会い

ニューヨークでの生活は1年に及んだ。博覧会ではジャパンビビオン・生活館でコンパニオンをしたり、VIPのアテンドもした。着物を着て日傘を差し、パレードに参加したときは、ゲイシャガール! ビューティフル! などと声をかけられた。
このアメリカ滞在中に、今野さんに人生を変える大きな出会いがあった。

は、より遠くへ行き、より多く体験せよ。それが、あなたの10年後に生かされる」
バラバラと見ていたところ、聞いたことのない「TAS(テレフォン・アンサンブル・サービス)」という言葉が目にとまった。好奇心と行動力の塊だった今野さんが、その会社に電話をかけ、どんな仕事なのかを根掘り葉掘り聞いたところ、そんなに知らなかったらマンハッタンのオフィスまで来ればいいと言った。休日を利用して足を運ぶと、迎えてくれたのが電話秘書サ

「私は、日本に帰ったら、あなたと同じように起業する。で



ニューヨーク世界博覧会では、今野さんは、コンパニオンの班長を務めた(右から3人目)

電話秘書サービスは、毎月決まった金額で会員と契約し、24時間、秘書対応をするというビジネス。メディアや情報という分野に興味があった今野さんは、この仕事を運命の出会いを感じた。
「私は、日本に帰ったら、あなたと同じように起業する。で

マリア像の前でほほえむ今野さん。2007年には「旭日中級章」を受賞した



自分の生きざまに見た母の面影

バブル崩壊など、さまざまな環境の変化に際しながら、47年間、会社の存続と発展に力を注いできた今野さん。時代のニーズに合わせて、「24時間いじめ相談ダイヤル」「セクハラ・人間関係ホットライン」など、サービス幅を広げていった。そんな今野さんを尊敬し、慕う企業家は多く、いつしかベンチャーの母と呼ばれるようになった。相談に乗るばかりか、ときにはそうしたベンチャー

企業を持つこともある。「気がつけば母とおなじことをしているんですね。人に何かをしてあげることが最大の喜びである母は知っていた。いまになって、母の偉大さがわかる。私は母をいまだに超えることができません」前出の南場さんは、仕事で困ったときに今野さんに相談に乗ってもらったという。「今野さんは、困って頼ってくる人は絶対に見捨てない。厳しいことをおっしゃいます

が、本当にこちらのことを思っていてくれることだと伝わってくる。心の温かい人だと思えます」今野さんは、60代になって養子を迎えた。現在、株式会社「Anate」代表取締役、ダイヤル・サービスの取締役も兼ねる今野謙司さんだ。謙司さんは日本で生まれ、画家だった父の仕事で、8歳まで欧州、ブラジル・サンパウロで過ごしたあと帰国。中学時代に柔道で頭角を現し、当時住んでいた群馬県から別の県の高校に特待生として入学したが、先輩やOBから言いがかりをつけられ、壮絶なリンチを受けた。

それをきっかけに、高校を1年で中退。18歳でIT系の会社を立ち上げ、20歳のときに、ある企業の社長の紹介で、それまで名前も知らなかった今野さんに出会った。「実の母が亡くなったときに、初めて会ったときに、お母さんになって」と言ったら3秒後に「いいわよ」と。ほとんど話をしませんでした。が、すぐに「愛する息子へ」という、キーファアの「13人の使徒」の絵ハガキをいただきました。でもそのときは、今のような関係になるとは思いませんでした」

実際に養子に入ったのはその3年ほどあとのことだ。長期出張から帰った今野さんを、うれしくてハグして迎えようとしたら、いきなり大外刈りかけられたという。おちゃめなエピソードも。「なにをするんだ？」と驚いていたら、隙をつくったら駄目よ！と冗談で言う。僕にだけしか見せない笑顔が好きです」親子関係はいろいろあったが、今は良好だ。仕事において今野さんは、全くブレない人なのだという。「僕が数億の仕事を決めても別に喜んでくれないね。金額なんてどうでもいい、オリジナルであるか、独自性があるか、そして世のため、人のためになるかということが、起業家として大切なことで、すべてだよ」夫とは別々の道を歩むことになったが、いまでも謙司さんを変え、3人で定期的に食事をするという。

◆ ニューヨーク世界博で広報をしていたある日、今野さんは、アメリカの著名なジャーナリストの取材を受けた。車イスのその人は、なんとあの夜、桑名を爆撃して、今野さんの命、といえるものを奪

取材/編集部
撮影/伊藤和幸

1969年、ダイヤル・サービス(株)設立当時



も、日本で女性が起業するなると言う。誰も取り合ってくれない」と話したら、彼女は「It's only yesterday」と言うんです。自分たちもガラスシリング(ガラスの天井)女性界進などを阻む見えない壁を破ってきたのだと。日本ではもっと厚い氷の天井かもしれないが、誰かが破らなければ新しい時代は来ない。海のこちら側から私たちが応援していることを忘れないでと、励ましてくれました」

今野さんとはケンカ友達だという、作詞家・音楽評論家の湯川れい子さん(79)は、同じ年として、女性に立ち上がる壁を身をもって経験してきたひとりだ。「ニューヨーク世界博があった1964年に、私もアメリカに飛び発ちました。女性が

世界中の電話による育児相談、「赤ちゃん110番」を始めたのは1971年のこと。核家族化が進み、育児放棄したり、赤ちゃんに手をかけるという悲しいニュースが相次いだ時代。孤独の中で子育てをするお母さんたちのために、相談員がマンツーマンで対応するというサービスを思いついたのだ。「赤ちゃん110番」はマスコミの注目を

大いに集め、開始当日は電電公社(現NTT)の回線がパンクするほどの盛況ぶりだった。しかし、このサービスはビジネスとして成り立たなかった。日本では「公衆電気通信法」という法律によって、電話による情報料の課金は禁じられていたのだ。

10年間、必死で貯めた資金もまたたく間に底をつき、今野さんは、資金を作るまで時間が欲しいと、社員に頭を下げた。「そのとき、社員たちから、誓いの絵皿を贈られたんです。自分たちの志はひとつ。軌道に乗るまでは、手弁当でかまわないからこのまま仕事を続けさせてほしい、くじけそうになったら、この絵皿を見て頑張ってほしい」と。「赤ちゃん110番」は、全員の女性からの相談も多かったのですが、私が知らないうちに、相談員の彼女たちは、勤務時間外にそうした方たちのリストを作ってくれて、もし何か困ったことがあったら、24時間いつでも連絡するようにとみんな自宅の電話番号を伝えていたんです。それを知って、もう2度と彼女たちにこ

32歳、念願の起業を果たすが……

(女でも社長になるのが当たり前の社会にしてみせる)

今野さんは起業という目標に向かって突き進んでいった。コンパニオンの仕事が終わると、曾野さんの言葉を体現するように、貯めたお金でヨーロッパへと渡る。アメリカで知り合った人に紹介され、ベルリンの「レストラン・トキーヨ」のウェイトレスをしながら、ヨーロッパの国々を歩き、見識を広げた。

今野さんが結婚したのも、このヨーロッパ滞在中だ。お相手は、TBS「街の歌声」のレポーター時代に、当時入社1年目でフロアディレクターをしていた今野勉さん。のちに名プロデューサーとなり、制作会社「テレビマンユニオン」を創立した人物だ。ヨーロッパ滞在中、送られてきた婚姻届に判を押しただけの結婚だった。

「だから、結婚記念日はいつもわからないんです(笑) 社会に出るには、天井どころか360度壁だらけといった状況でした。目指す道のロールモデルがないなか、彼女は電話のビジネスに苦心していたらうし、私はロックやポップスといったものが語るに足るものなのか、女性の音楽評論家やDJというものがな

い中、それで食べていけるのだろうかと常に不安がありました。出会ったのは後年ですが、お互いに共通項がありましたね。彼女とは同級生のような感覚でいられますし、何も話さなくても、ただ一緒にいるだけでいいという存在です」



1996年、日米女性起業家シンポジウムに出席